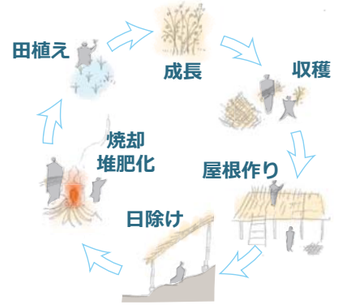
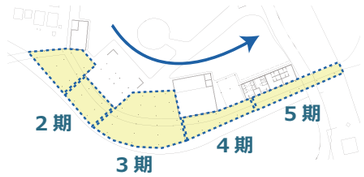
循環の集落 ～大きな循環の中に身をおき、楽しむための木造建築群～

雨が集まり川となり海に注ぎ、雲となってまた大地に降り注ぐ。ときに激しくときに豊かな水の循環は、様々な生物のくらしと結びついています。ここでは、身体を介して水の周りに生息する生き物と触れ合う場所を提案します。季節や天候で変わる「流れと淀み」それらが育む生態系を身近に感じられる居場所をめざしました。

地域に根差した「循環」する公共の建築 【設計コンセプト】

「県が建て、運営する建物」ではなく、村民が日頃から関わりを持てる公共の場を目指します。相良村で毎年獲れる水田の藁を基に、村の人たちで大屋根を更新するイベントを通じて、自分たちの心の拠り所となる公共の建築を目指します。



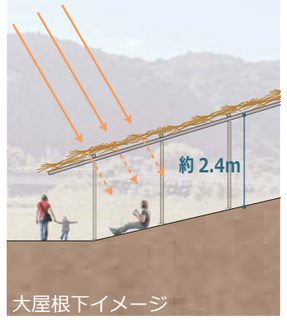


大屋根を５つのエリアに分け、５年かけて順繰り葺き替えます。毎年イベントとして葺き替えることで、活動が定着していきます。

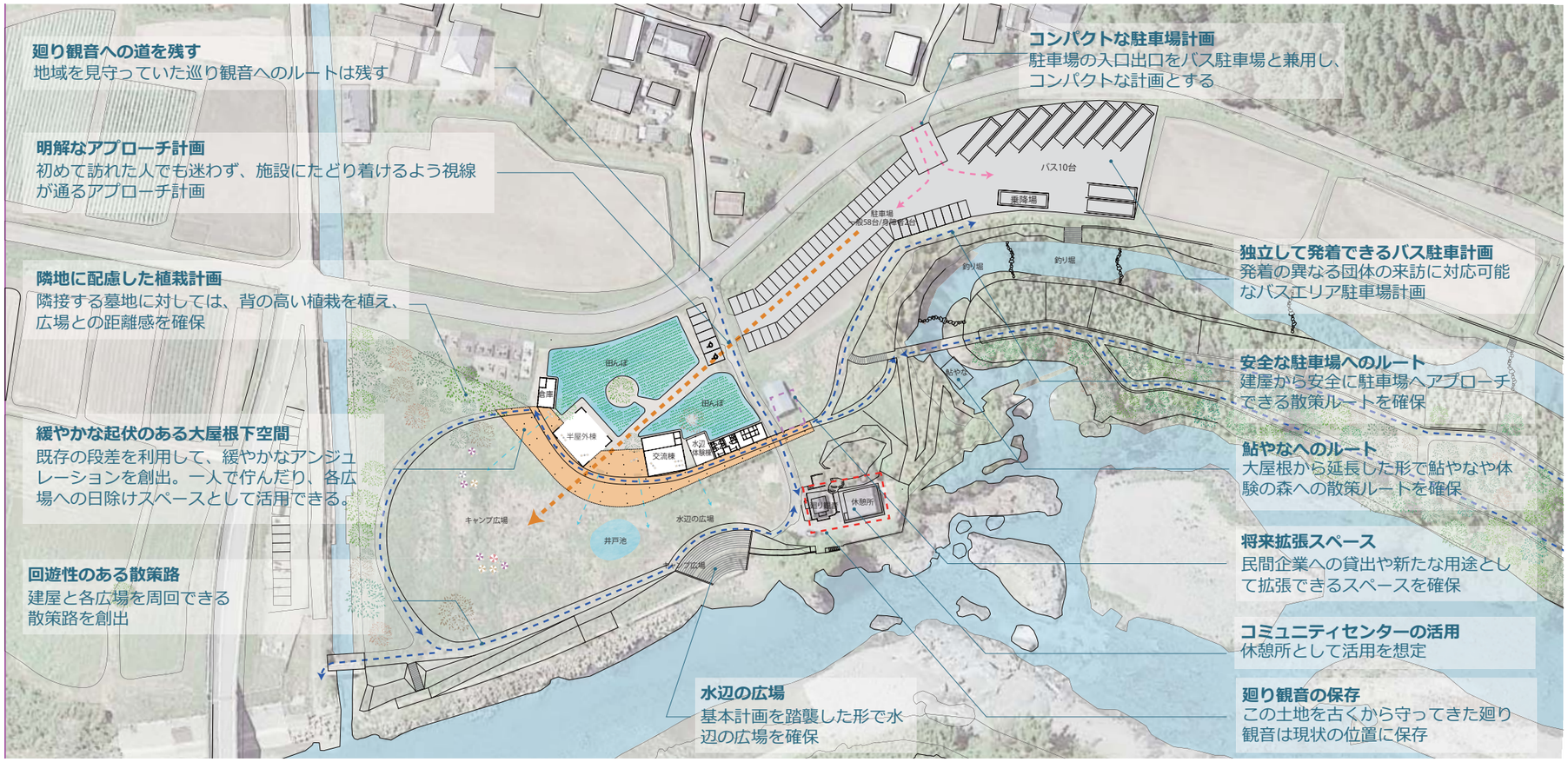
藁屋根イメージ

大屋根下イメージ

夏の強い日差しを和らげる日除け効果があります



大屋根下イメージ



七つの循環 【計画骨子】

１．風景の循環　水田
既存の水田を一部残し、相良村の里山風景と繋げ、風景の循環を感じられる場所を提案します。

２．水の循環　水の流れに触れる
春から夏の水田、農業用水路、雨の日に現れる小川、井戸端広場、川辺など、ここに水の循環の中継地点をいくつか設け、その一つ一つに小さな生態系が生まれる仕掛けを作ります。

３．生物の循環
稲という植物、その周りに暮らす生き物、川辺川までの水の経路の途中に暮らす生き物を感じることができます。

４．素材の循環　藁をつかう
稲藁でできた日除けの大屋根。秋に近隣の田から稲藁を集め、地元の子どもと一緒に屋根を葺きます。村民が関わり、集うきっかけを作ります。

５．活動の循環　みんなでつくり続ける大屋根
大屋根を５つのエリアに分け、５年かけて順繰り葺き替えます。毎年イベントとして葺き替えることで、活動が定着していきます。設計者も指定管理者として、有機的な大屋根の維持管理に継続的に関わります。

６．森の循環　地産地消の木材利用
使用木材は県産材とし地産地消を図ります。地元の大径木の活用、歩溜まり良い木取りなどで、コスト削減を目指します。

７．技術の循環　木造軸組みの開かれた技術の冗長性
最長 6 メートルの木材で、大きな重機を使わない構法とします。在来木造の技術を用いることで地元の施工者が新築、増築、保守・メンテナンスなど様々な段階に主体的に関わることができます。

循環の集落　～大きな循環の中に身をおき、楽しむための木造建築群～

既存の田んぼの形を整えた上で活用し、里山風景のランドスケープを作る。田と藁屋根の運営・管理については、設計者が指定管理者と協力しながら、循環の風景を維持していく。

集落のような、みんなが集まる建屋計画　【建物平面計画 1/500】

構造形式
熊本県産の杉・桧を使用した在来木造スパン（一部６ｍ超える箇所は、県産流通製材を組みあわせトラス構造、平屋の藁屋根　部分の基礎は、コストを最小とする簡易な直接基礎として計画）

集落のような分棟形式
建物は廻り観音などのように、住宅スケールに合わせて複数の集まりのヒューマンスケールな居場所とし、周辺環境との親和性も持たせます。

相良村の集落

水辺体験棟	114.86 ㎡
交流棟	119.24 ㎡
半屋外棟	139.12 ㎡
倉庫棟	37.26 ㎡
合計	410.48 ㎡
屋根下	730.38 ㎡
全体面積	1140.86 ㎡

軒下をつくる

外に居場所を作る大屋根
気持ちの良い日に外に居やすくなるための藁の大屋根。有機的な素材が適度に直射光を遮り、土手状の床に木陰のような陰影を作ります。それぞれの棟をつなぎ、北川敷地への将来的拡張も見据えた配置です。キャンプや水辺の広場を結ぶ動線ともなります。

自然と近い建物群の特徴　【技術的計画】

自然を身体で感じる建築

この場所を五感で感じるために、外部の居場所を増やし、快適な時期には開け放って外と一体化できる設えとします。
外壁に使われる素材は、物性を表した形で表現し、内装材は県産材等の温もりを感じられる使い方をします。

外壁材の表情の一例

川辺川を楽しむ

出展：広報さがら 2023 年 11 月号

自然の水や熱を活用

トイレ・シャワーには、井戸からの井水と雨水を活用します。夏は水田側の開口部と片流れの上部の重力換気によって、水を渡る冷気を建物にとりこみ、冬は廊下式し空調エリアを限定し、開口部や外壁の断熱性能を確保した上で、秋に葺き替えた廃材の藁を燃やして暖をとります。

井戸を囲んでイベント

井戸の水

雨水

焚火

自然と共生された風景を五感で感じることができる建屋計画　【断面計画 1/500】

川のせせらぎや心地よい風、鳥の囀りや席の声、稲刈りの香り等、相良村に漂う自然と共生された風景を五感で感じることができる施設を目指します。

自然の理を活用する形
光と風と水を無駄にしないように、自然の通風と採光と集水を積極的に活用します。外の環境をよく感じとり、使い手自らが窓やカーテンをこまめに開け閉めしやすい建築を目指します。

台地に建てる
豪雨災害を忘れず、水との関わりを見つめ直すために、災害時の増水を避け、想定敷地の台地の上に少し嵩上げした場所に建物を配置します。建築材料は、汚れや破損に対して懐の深い自然由来の材を用います。

断面イメージ（1/500）

概算工事費：190 百万円